

[学会] 第482回 千葉医学会例会  
第22回 千葉皮膚科臨床談話会

(昭和44年3月16日, 於千葉大学附属病院第1講堂)

1. 狼瘡瘡

飯谷 稲子 (千大)

77才, 女子。左頬部腫瘍を主訴として昭和43年10月31日受診。7才頃より左頬部に発疹を生じ漸次拡大して40才代には顔面左側大半を占める癩痕面となった。1年前より左頬骨部の癩痕上に小腫瘍が発生し, 増大したため来院。顔面左側の大半は暗赤色の癩痕で, 左頬骨部では癩痕上に鳩卵大の半球腫瘍がある。左鼻唇溝に近い癩痕中に diascopy にて黄褐色を呈する小結節を認める。腫瘍は組織学的に有棘細胞癌であり, 小結節の組織像は結核結節であった。Manthoux 反応強陽性赤沈1時間24mm, 胸部レ線撮影では左肺門リンパ節の石灰化のみ, 試験切除標本の結核菌培養は1回施行するも陰性, 動物腹腔内接種試験陰性。永年続いた尋常性狼瘡の上に生じた有棘細胞癌と診断し, 腫瘍の全摘除とともに全層植皮を行ない, また, 結核に対する化学療法を実施した。

2. 白癬菌毛瘡の一例

西村 和子 (千大)

患者は70才, 男。初診は昭和44年1月29日, 家族歴, 既往歴に特筆すべきことはない。

現病歴: 8カ月前虫さされに引続いて, 被髪頭部, 顔面, 軀幹に痒痒性皮膚出現, 某医の治療により顔面の皮膚を除いて治癒したが, 顔面はかえって増悪してきた。

現症: 口周囲の鬚髯部に毛嚢一致性の紅斑丘疹落屑性変化あり, その多くは毛孔を中心として膿疱を有し, 又一部は毛嚢炎とその周囲炎を起こし, 膿性結痂をつけている。両頬部は連環状に配列した紅斑丘疹落屑性変化がある。

検査成績: 軽度の白血球増多, 血沈の亢進, A/G 比の逆転の他は異常ない。膿疱の細菌培養は陰性。頬部, 口唇の落屑, 結痂, 毛嚢の直接検鏡で糸状菌が認められ, 培養により猩紅色菌と同定された。

グリセオフルビン 1g/day にて経過観察中である。

[討論]

宮治 糸状菌を直接皮下に接種するとどうなるか。

Trichophyton 特に rubrum の浸襲性は強くないといわれてきたが, われわれの経験によれば, 全ての rubrum にそうであるとはいえない。

石井(孝) 治療は。

西村 1月29日以来 griseofluvin を使用している。

経過を追った培養はできていない。

竹内教授 感染と発症とは必ずしも pararell にゆかぬ。

3. Leucaemia cutis

高野 元昭 (千大)

51才, 男子。1965年, 両手の接触性皮膚炎が全身に拡大。1967年9月, 再発増悪して当科入院。体格中等, 栄養良。下腹, 鼠蹊, 膝臑の著明な黒色素沈着, 皮膚肥厚を中心に, 全身に多少の色素沈着があり, 四肢伸側, 末梢には, 糜爛, 色素沈着を伴う, 鳩卵大前後の結節をみ, さらに丘疹落屑性変化が全身を覆っている。リンパ節は各肢根, 頸部で指頭大以下に数個ずつ触れ, 単球が10%で, 入院中は皮膚の増悪と相関して, 2万程度の白血球増多, 細網系病的細胞の出現をみた。大量のステロイド剤・Endoxan・6MP・Bleomycinなども一時的効果に止まり, 1968年9月, 肺炎を合併して死亡。剖検では, リンパ節, 脾等の細胞に異型性があるほかは, 皮膚以外に特異的所見を見出し得ず, 皮膚細網系を主座とする腫瘍血症と解して, 広義の皮膚白血病とした。

4. Morbus Darier の一例

番場秀和 (千大)

43才, 女。母親に同症あり。約30年来, 顔・被髪頭部・軀幹・四肢などに自覚症不定の丘疹性・結痂性皮膚に悩んでいた。手指・手背・足背には疣贅状丘疹が密生していた。夏期増悪傾向あり, 悪臭も指摘された。胸腹部内景に異常なく, 暗順応・知能指数などを含む一般検査は略々正常範囲内であった。組織学的所見は定型的。手背の疣状丘疹のそれは, Hopf のいう Acrokeratosis verruciformis の像に一致した。入院の上, 局麻下に Grindler などによる Skin Abrasion を数回にわたり施